原著論文

町家カフェファサードにおける日本人と韓国人の感性評価の比較

奥田 紫乃

同志社女子大学

Comparative Study on Evaluation of Machiya-Cafe Facade by Japanese and Koreans

Shino OKUDA

Doshisha Women's College of Liberal Arts, 602 Genbu-cho, Kamigyo-ku, Kyoto 602-0893, Japan

Abstract : Kyoto is one of the most famous historical tourist cities in the world. The final goal of this study is to establish a design system for Machiya-Cafe facades in this historical tourist city. This paper focused on evaluating Machiya-Cafe facades in Kyoto, and the common and different points of the evaluation between Japanese and Koreans. University students from South Korea, who lived in Kyoto-city, and tourists from South Korea to Kyoto participated in these subjective experiments. They evaluated a number of different Machiya-Cafe facades in terms of "Recognition", "Familiarity", "Restfulness", "Regionality" and "Preference". As a result, it was found that the evaluations of "Recognition", "Familiarity", "Regionality" and "Preference" of Machiya-cafe facades by Koreans were common with those of Japanese, whereas the evaluation of "Restfulness" by Koreans differed with those of Japanese.

Keywords : *Machiya-cafe facade, Japanese, Koreans*

1. 序 論

京都は日本を代表する世界的観光都市の一つであり、国内外を問わず多くの観光客が京都を訪れている。2013年には約5162万人の観光客が京都を訪れ、今後もその数は増加傾向にある[1]。京都市では、京町家などの活用による個性あふれる店舗や工房などが集積する観光スポットを創出することにより、歩いて楽しむ「まちなか観光」を推進している[2]。また、近年の外国人観光客の増加を踏まえ、都市の品格と魅力を高めることで、世界中の人々を魅了するまちづくりが計画されている[3]。京都を訪れる観光客は、寺社仏閣等の複数の観光対象をめぐりながら移動する「回遊型」をとるため[4]、その回遊コースにあるまちなみ景観、すなわち京町家の存在が、京都観光の質の向上に大きな役割を果たしているといえる。

京町家には、格子、虫小窓、簾、瓦、暖簾などの外観の特徴があり[5]、これらのファサード構成要素が、街並み景観の保全に寄与していることが知られている[6]。現在では町家を商業施設にリノベーションする事例が多く見られ[7]、その中には喫茶・軽食を中心とした飲食店、いわゆる町家カフェに転用される事例も見られる[8]。このように、既存の伝統的建造物を積極的に活用し、観光集客とまちなみ保存を両立させるような町家ファサードデザインが求められている。

町家ファサードのデザインに関する先行研究として、著者らは京都における町家カフェファサードをスクリーン画像により被験者に提示した実験[9]や縮尺模型を用いた実験[10]、モニター画像を用いて京都および高山町家を評価させた実験[11]を実施している。これらの研究では、いずれの画像提示手法においても、格子や植栽などのファサード構成要素が町家ファサードの評価に影響を及ぼし、格子密度が低いほ

ど「わかりやすさ」や「入りやすさ」の評価が高く、適度な格子密度条件で「落ち着きやすさ」の評価が高いことを示している。また、京都や高山のような町家が立ち並ぶ景観保存地域においては、その町家ファサードに対する評価構造は極めて類似しており、両地域に共通のファサードデザイン手法を適用できることを示している。一方、「地域らしさ(地域性)」や「好ましさ(総合評価)」では、その地域独自の特徴をもつ一部の町家ファサードに対する評価において、評価者の出身地(京都/岐阜)の違いによる相違点を指摘している[12]。したがって、京都を訪れる外国人観光客による京町家ファサード評価においても、日本人による評価との共通点や相違点があることが予想される。

被験者の出身国が景観評価に影響を及ぼすことについては、幾つかの研究が報告されている。日本・中国・欧州の各地域の出身者を被験者として、景観を評価させた実験[13]では、景観の物理的特性に関する評価において、各地域の出身者による評価は共通していたが、総合評価においては出身地による相違点が報告されている。また、日本人大学生と中国人留学生を対象とした景観評価時の注視点に関する検討[14]では、注視点の時系列的な変化において両者は共通しているものの、イメージ評価においては日常的に見慣れないものに対する評価に相違がみられることが報告されている。さらに、日本人学生、中国人留学生、中国人学生を対象とした景観画像に対する心理評価に関する検討[15]では、「訪問希望の有無」や「関心の有無」において、概ね共通した傾向がみられるが、その地域を代表する伝統的景観に対する評価においては相違がみられることが報告されている。

京都に宿泊・滞在する外国人観光客の約46%はアジアからの観光客であり、台湾や中国、韓国からの観光客が上位を占めている[1]。韓国には韓屋とよばれる伝統的木造住宅があ

り、都心部では韓屋を保全・継承するために様々な施策が為されている[16, 17]。これらの韓屋は住宅として利用されるだけでなく、店舗やギャラリー、工房、博物館などに転用され、地域の活性化や観光都市としての発展に寄与している[17, 18]。このような文化的背景を鑑みると、日本を訪れる韓国人観光客を対象とした町家ファサード評価において、日本人を対象とした評価手法を適用し、両者を比較検討することにより、町家ファサードに対する韓国人の感性について考察できるのではないかと考えられる。

以上の事柄を踏まえ、本研究は歴史的観光都市にふさわしい景観を形成する町家ファサードデザイン手法を構築することを最終目標とし、外国人観光客による町家ファサードに対する評価を明らかにすることを目的とする。本稿ではその第一段階として、韓国人女性による町家カフェファサード評価実験を実施し、日本人女子大学生による評価[9]との共通・相違点を明らかにすることにより、町家カフェファサードにおける日本人と韓国人の感性評価を比較検討する。なお本研究では、日本における滞在期間や町家に関する知識の有無、評価実験における提示条件数や提示方法、1被験者あたりの実験時間などを考慮し、日本滞在期間が比較的短い韓国人女子留学生を対象とした実験、および京都への訪問回数が比較的少ない韓国人女性観光客を対象とした調査結果に基づき考察する。

2. 韓国人留学生による町家カフェファサード評価

2.1 実験概要

先行研究[9]で、京町家のファサード構成要素を変化させることにより作成した70種の町家カフェファサード画像の中から、腰壁の無い出窓、および掃き出し窓に平格子が設置された開口部をもつ町家ファサードに限定し、評価に影響を及ぼす要因である格子の密度、植栽の量、および暖簾の有無に着目して、表1に示す計43種の町家カフェファサード画像を選定した。

これらの画像を、図1に示す暗幕で覆われた空間内に設置されたモニター[Apple thunderbolt Display]上にランダムに提示して、被験者に評価させた。評価においては、先行研究[10]で示した町家カフェファサードとして求められる要件に基づき、「明瞭性」、「親和性」、「休息性」及び「地域性」の評価側面に対して、それぞれ「わかりやすさ（その外観がカフェであることがわかる）」、「入りやすさ（カフェを利用しやすい）」、「落ち着きやすさ（カフェで落ち着ける）」、「地域らしさ（外観から地域性が感じられる）」の4項目、及びこれらの総合評価としての「町家カフェの好ましきさ」をそれぞれ表2に示す6段階の評価尺度を用いて、一人1回ずつ評価させた。

表1 町家カフェファサード画像

格子密度	植栽：無		植栽：小		植栽：中		植栽：大	
	暖簾：無	暖簾：有	暖簾：無	暖簾：有	暖簾：無	暖簾：有	暖簾：無	暖簾：有
無								
低								
中								
高								
極高								
全面壁

図1 実験空間

表2 評価項目および評価尺度

わかりやすさ	入りやすさ	落ち着きやすさ	地域らしさ	好ましきさ
非常にわかりやすい	非常に入りやすい	非常に落ち着きやすい	非常に京都らしい	非常に好ましい
わかりやすい	入りやすい	落ち着きやすい	京都らしい	好ましい
ややわかりやすい	やや入りやすい	やや落ち着きやすい	やや京都らしい	やや好ましい
ややわかりにくい	やや入りにくい	やや落ち着きにくい	やや京都らしくない	やや好ましくない
わかりにくい	入りにくい	落ち着きにくい	京都らしくない	好ましくない
非常にわかりにくい	非常に入りにくい	非常に落ち着きにくい	非常に京都らしくない	非常に好ましくない

町家カフェファサードにおける日本人と韓国人の感性評価の比較

実験は、2012年6月から2014年9月に、同志社女子大学生活科学部住生活学研究室にて実施した。実験には、同志社女子大学、京都工芸繊維大学、および京都大学に所属する京都市内在住の20代の韓国人女子留学生10名が参加し、実験参加時における日本滞在期間は、半年未満が4名、9ヶ月が3名、1年半が2名、2年半が1名であった。

2.2 韓国人留学生による町家カフェファサード評価結果

図2に、町家カフェファサードに対する韓国人留学生の評価結果を、日本人大学生による評価結果[9]と共に平均値で示す。本研究および先行研究[9]で得られたデータはいずれも独立なデータであり、結果の分析においては、データの正規性および等分散性を確認のうえ、IBM SPSS Statistics

20.0を用いて、二元配置分散分析ならびにTukeyの多重比較を行った結果に基づき考察する。

「わかりやすさ」では、格子条件が評価に影響し($F(42,1204) = 71.980, P < .001$)、格子密度が高いほどわかりにくい傾向がみられる。また、植栽「中」、暖簾「無」、格子密度「低」の条件、植栽「中」、暖簾「有」、格子密度「極高」の条件、および植栽「大」、暖簾「有」、格子密度「低」の条件において、韓国人留学生と日本人大学生の評価に1段階程度の評価の差がみられるものの、いずれの条件においても、韓国人留学生と日本人大学生の評価に有意な差はみられなかった($P > .05$)。したがって、「わかりやすさ」においては韓国人留学生と日本人大学生の評価の傾向は共通しているといえる。

図2 町家カフェファサードに対する日本人大学生・韓国人留学生の評価結果

「入りやすさ」では、格子条件が評価に影響し ($F(42,1204) = 45.031, P < .001$)、格子密度が高いほど入りにくい傾向がみられる。また、植栽「小」、暖簾「無」、格子密度「中」の条件において、韓国人留学生と日本人大学生の評価に1段階程度の評価の差がみられるものの、いずれの条件においても、韓国人留学生と日本人大学生の評価に有意な差はみられなかった ($P > .05$)。したがって、「入りやすさ」においては韓国人留学生と日本人大学生の評価の傾向は共通しているといえる。

「落ち着きやすさ」では、格子条件が評価に影響し ($F(42,1204) = 8.277, P < .001$)、韓国人留学生による評価結果において、格子条件が「低」から「中」程度の条件で評価が比較的高く、「やや落ち着きやすい」以上の評価が得られていることがわかる。一方、日本人大学生による評価結果では、植栽「大」の条件を除き、格子密度「中」から「高」の条件において評価が高い傾向がみられる。植栽「無」、暖簾「無」、格子「無」の条件、および植栽「中」、暖簾「有」、格子「無」の条件において、韓国人留学生による評価が日本人大学生による評価よりも高く ($P < .05$)、植栽「無」、暖簾「有」、格子密度「高」の条件、および植栽「中」、暖簾「有」、格子密度「高」の条件において、日本人大学生による評価が韓国人留学生による評価より高いことが示された ($P < .05$)。以上の結果から、韓国人大学生は日本人大学生よりも、格子密度が粗い条件で落ち着きやすく感じる傾向があることが示唆された。

「地域らしさ」では、格子条件が評価に影響し ($F(42,1204) = 12.827, P < .001$)、韓国人留学生による評価結果において、格子「無」の条件で「やや京都らしくない」の評価が得られ、格子密度「中」から「極高」の条件で「やや京都らしい」以上の評価が得られている。また、「全面壁」の条件において、日本人大学生よりも韓国人留学生の評価の方がやや高い傾向がみられる。しかし、いずれの条件においても、韓国人留学生と日本人大学生の評価において有意な差はみられなかった ($P > .05$)。ことから、「地域らしさ」においては韓国人留学生と日本人大学生の評価の傾向は共通しているといえる。

「好ましさ」では、格子条件が評価に影響し ($F(42,1204) = 13.959, P < .001$)、植栽条件や暖簾条件により若干の違いはあるが、格子密度「低」から「高」の条件において「やや好ましい」以上の評価が得られている。また、植栽「小」、暖簾「有」で格子密度が高い条件において、日本人大学生よりも韓国人留学生の評価の方がやや高い傾向がみられるものの、いずれの条件においても、韓国人留学生と日本人大学生の評価に有意な差はみられなかった ($P > .05$)。したがって、「好ましさ」においては韓国人留学生と日本人大学生の評価の傾向は共通しているといえる。

3. 韓国人観光客による町家カフェファサード評価

3.1 調査概要

京都市内にある5箇所の宿泊施設に、2014年9月から11月に滞在した韓国人観光客を対象として、京町家ファサードに

対する評価に関する調査を実施した。調査対象者は、調査に関する同意が得られた韓国人女性25名で、20代が14名 (56%)、30代が9名 (36%)、10代および40代が1名 (4%) ずつであった。また、京都訪問回数については、10名 (40%) が初めての京都旅行、10名 (40%) が2~3回目、5名 (20%) が4~5回目の京都旅行であった。

調査を実施した宿泊施設における時間的・空間的制限を考慮し、表1に示した43種の画像の中から評価対象画像を選定することとした。選定においては、ファサードの開口率 (外部から内部が見える面積の外壁面積に対する割合) が各種評価に影響する [9] ことを踏まえ、開口率に最も影響を及ぼす格子密度条件に着目して、植栽および暖簾が無く開口率が多様に変化する5段階の格子密度条件 (無・低・中・高・全面壁) を選定した。さらに、格子密度条件が低・高の場合における暖簾の有無や植栽の量 (中・大) が異なる条件を加え、計15種の町家カフェファサード画像 (表1中の画像1, 9, 10, 13, 14, 15, 16, 17, 25, 26, 29, 30, 31, 32, 36) を評価対象とした。これらの画像を、A4光沢紙 [サンワサプライ, JP-EP4NA4] にインクジェットプリンタ [Canon, MG7130] でカラー印刷したものを、調査対象者にランダムに提示した。

調査は、各宿泊施設におけるロビーの一角や談話室など、限定された静穏な空間で、一人ずつ実施した。評価においては、韓国人留学生評価における画像提示の際と同じ視角となるよう視距離を調整のうえ、一画像ずつ評価者正面に提示し、表2に示した「わかりやすさ」、「入りやすさ」、「落ち着きやすさ」、「京都らしさ」、および「好ましさ」について、韓国人留学生による評価と同様に、それぞれ6段階の言語評価尺度で回答させた。

3.2 韓国人観光客による町家カフェファサード評価結果

図3に、町家カフェファサードに対する韓国人観光客の評価結果を、日本人大学生による評価結果 [9] と共に示す。図中には、図2で示した韓国人留学生による結果も併せて表記している。本研究および先行研究 [9] で得られたデータはいずれも独立なデータであり、結果の分析においては、データの正規性および等分散性を確認のうえ、日本人大学生、韓国人留学生、および韓国人観光客に共通する15種の町家カフェファサードで得られたデータを対象として、IBM SPSS Statistics 20.0を用いて二元配置分散分析ならびにTukeyの多重比較を行った結果に基づき考察する。なお、韓国人観光客による評価において、年代の違いによる評価に差がみられなかったことから、25名分のデータを用いて分析を行った。

「わかりやすさ」では、格子条件が韓国人観光客の評価に影響し ($F(14,372645) = 53.804, P < .001$)、格子密度が高いほどわかりにくい傾向がみられる。また、植栽「無」、暖簾「無」、格子「無」の条件でのみ、日本人大学生よりも韓国人観光客の評価が1段階程度低かった ($P < .01$)。しかし、この条件で得られたわかりやすさ評価値は、本調査で提示した全15条件の中で最も高いことから、韓国人観光客は、店舗内部の

町家カフェファサードにおける日本人と韓国人の感性評価の比較

図3 町家カフェファサードに対する日本人大学生・韓国人留学生・韓国人観光客の評価結果

様子が最もよく見える条件においても、日本人大学生ほどわかりやすく感じていないと考えられる。しかし、この条件を除く全ての条件において、韓国人観光客と日本人大学生の評価に有意な差はみられなかった ($P>.05$) ことから、「わかりやすさ」においては、韓国人観光客と日本人大学生の評価の傾向は概ね共通しているといえる。

「入りやすさ」では、格子条件が韓国人観光客の評価に影響し ($F(14,645)=40.690, P<.001$)、格子密度が高いほど入りにくい傾向がみられる。また、植栽「中」、暖簾「無」、格子密度「低」の条件で、日本人大学生よりも韓国人観光客の評価が1段階程度低かったが、いずれの条件においても韓国人観光客と日本人大学生の評価に有意な差はみられなかった ($P>.05$)。したがって、「入りやすさ」においては、韓国人観光客と日本人大学生の評価の傾向は共通しているといえる。

「落ち着きやすさ」では、格子条件が韓国人観光客の評価に影響し ($F(14,645)=9.455, P<.001$)、格子密度が高い条件で落ち着きにくいと評価される傾向がみられる。一方、2.2節で述べたとおり、日本人大学生の評価では、格子密度「中」から「高」の条件で高い評価が得られている。植栽「無」、暖簾「無」、格子「無」の条件において、日本人大学生の評

価は「やや落ち着きにくい」から「落ち着きにくい」であるのに対し、韓国人観光客は「やや落ち着きやすい」と評価している ($P<.05$)。また、植栽「大」で暖簾「有」の条件を除く全ての植栽・暖簾条件において格子密度「高」の場合、日本人大学生の評価は「やや落ち着きやすい」以上であるが、韓国人観光客の評価は「やや落ち着きやすい」以下であった ($P<.01$)。以上のことから、韓国人観光客は日本人大学生よりも、格子密度が粗い京町家ファサードを落ち着きやすく、格子密度が密な京町家ファサードを落ち着きにくく感じるということが明らかとなった。

「地域らしさ」では、格子条件が韓国人観光客の評価に影響し ($F(14,645)=14.023, P<.001$)、植栽「無」、暖簾「無」、格子「無」の条件において、「やや京町家らしくない」を下回る評価が得られている。また、植栽が「大」の場合はいずれの条件においても「やや京町家らしい」以上の評価が得られていることから、韓国人観光客は、格子や植栽の存在により京町家らしさを感じていると推察される。植栽「中」、暖簾「無」、格子密度「高」の条件で、日本人大学生よりも韓国人観光客の評価が1段階程度低いが、いずれの条件においても、韓国人観光客と日本人大学生の評価に有意な差はみられなかった ($P>.05$)。したがって、「地域らしさ」においては、

韓国人観光客と日本人大学生の評価の傾向は共通しているといえる。

「好ましさ」では、格子条件が韓国人観光客の評価に影響し ($F(14,645)=17.918, P<.001$)、格子密度が「極高」、および「全面壁」の条件では「やや好ましくない」を下回る評価が得られている。また、植栽「中」、暖簾「有」、格子密度「高」の条件で、日本人大学生よりも評価が1段階程度低かった ($P<.05$)。これは、同条件における韓国人観光客の「落ち着きやすさ」が低いことが、総合評価である「好ましさ」に影響したと推察できる。しかし、この条件を除く全ての条件において、韓国人観光客と日本人大学生の評価に有意な差はみられなかった ($P>.05$) ことから、「好ましさ」においては、韓国人観光客と日本人大学生の評価の傾向は概ね共通していることが示された。

4. 考 察

韓国人留学生を対象とした実験結果から、韓国人留学生と日本人大学生の町家カフェファサードに対する感性評価は概ね共通しており、「わかりやすさ (明瞭性)」、「入りやすさ (親和性)」、「地域らしさ (地域性)」、「好ましさ (総合評価)」において、両者に差はみられなかった。しかし、「落ち着きやすさ (休息性)」においては、落ち着きやすいと感じる格子密度条件において両者に差がみられ、日本人大学生は、格子密度「中」から「高」の条件で落ち着きやすいと感じる傾向であるのに対し、韓国人留学生は、格子密度「低」から「中」の条件で落ち着きやすいと感じる傾向がみられた。すなわち、韓国人は日本人よりも粗い格子に対して「落ち着きやすさ」を感じることを示唆された。

韓国人観光客を対象とした調査結果から、韓国人観光客と日本人大学生の町家カフェファサードに対する感性評価は概ね共通しており、「わかりやすさ (明瞭性)」、「入りやすさ (親和性)」、「地域らしさ (地域性)」、「好ましさ (総合評価)」において、両者の差はほとんど無いことが示された。一方、「落ち着きやすさ (休息性)」では、落ち着きやすいと感じる格子密度条件において両者に差がみられ、日本人大学生が落ち着きやすいと感じる格子密度「中」「高」の条件で、韓国人観光客は落ち着きにくく感じるということがわかった。これより、韓国人は日本人よりも粗い格子に対して落ち着きやすいと感じ、日本人が落ち着きやすいと感じるやや高密度な格子に対して、落ち着きにくく感じていることが明らかとなった。

なお、図3に示した韓国人留学生と韓国人観光客の評価を比較すると、両者に共通する15条件のうち1条件 (植栽「大」、暖簾「有」、格子密度「低」) でのみ、「わかりやすさ (明瞭性)」と「入りやすさ (親和性)」の評価において有意差がみられた ($P<.05$)。暖簾と植栽の存在により内部がほとんど見えない町家カフェに対して、韓国人観光客は、「ややわかりに

くい」、「やや入りにくい」と評価しているのに対し、韓国人留学生は、暖簾の存在により町家カフェに対して、「わかりやすい」、「入りやすい」と評価していることが読み取れる。これは、暖簾の役割を知らない韓国人観光客がいたことが影響しているのではないかと推察される。しかし、この1条件を除く全ての条件において、両者の間に有意な差はみられなかった ($P>.05$) ことから、本研究における韓国人留学生と韓国人観光客の町家カフェファサードに対する感性評価は、概ね共通しているといえる。ただし、暖簾の役割など日本文化に関する知識の有無が評価に影響を及ぼす場合には、検討の際に注意が必要である。

5. 結 論

本研究では、町家カフェファサード画像を用いた評価実験を実施し、韓国人女子留学生および韓国人女性観光客による評価と、日本人女子大学生による評価 [9] とを比較検討することにより、日本人と韓国人の町家カフェファサードに対する感性評価の共通・相違点について考察した。その結果、わかりやすさ (明瞭性)、入りやすさ (親和性)、地域らしさ (地域性) および好ましさ (総合評価) では、韓国人と日本人の感性評価の傾向は共通しており、両者の評価にほとんど差はみられなかった。一方、落ち着きやすさ (休息性) では、韓国人と日本人の感性評価の傾向に差がみられ、韓国人は日本人よりも、格子密度が粗い町家カフェファサードを落ち着きやすく、格子密度がやや密な町家カフェファサードを落ち着きにくく感じる傾向が示された。

以上の結果より、町家カフェファサードに対する韓国人と日本人の感性評価には多くの共通点が存在し、共通の概念を用いて歴史的観光都市・京都にふさわしい町家ファサードをデザインすることが可能であるといえる。しかしながら、「落ち着きやすさ (休息性)」における両者の感性評価の傾向が異なることから、町家ファサードをデザインするには、店舗の特性や、店舗利用者の特性を考慮することが必要である。

なお、本研究を含む一連の関連研究は、女性による評価を対象とした分析結果であるため、今後は男性による評価についても検討する必要がある。また、韓国以外のアジア人観光客による京町家ファサード評価や、欧米諸国からの観光客による京町家ファサード評価についても検討し、歴史的観光都市にふさわしい景観を形成する町家ファサードデザイン手法を構築したいと考える。

謝 辞

本研究の一部は、JSPS 科研費 24656356 (代表者: 奥田紫乃) の助成を受けたものである。また本研究は、当時同志社女子大学卒業論文生の辻澤香奈氏の多大なる尽力によるものである。ここに記して謝意を表します。

町家カフェファサードにおける日本人と韓国人の感性評価の比較

参 考 文 献

- [1] 平成25年 京都観光総合調査, 京都市産業観光局 MICE 推進室, 2014.
- [2] 京都市基本計画第1期: 第2章 2. 魅力ある観光, 2001.
- [3] 京都市基本計画第2期: はばたけ未来へ! 京プラン, 2010.
- [4] 山上徹: 観光の京都論, 学文社, 2010.
- [5] (財)京都市景観・まちづくりセンター: 京町家, 2003.
- [6] 牛谷直子, 増井正哉, 上野邦一: 歴史的街並みにおける景観形成の規範の抽出に関する事例的研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp.775-780, 2001.
- [7] 橋本清勇, 三村浩史, リムボン, 尹孝鎮, 伊沢はる: 京町家の建て替え・改造デザインと街並み形成に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, pp.481-486, 1992.
- [8] 持永愛美, 奥田紫乃: カフェファサードの構成要素がカフェの魅力に与える影響—京都の町家・洋風カフェを対象として—, 生活科学, 第44号, pp.16-21, 2011.
- [9] 持永愛美, 奥田紫乃: 京都における町家カフェのファサード構成要素及び内部からの漏れ光がファサードの評価に与える影響, 日本都市計画学会学術研究論文集, 45(2), pp.379-384, 2010.
- [10] 持永愛美, 奥田紫乃: 町家カフェの格子密度及びカフェ内部の光環境がファサードの好ましさ評価に与える影響, 日本建築学会環境系論文集, 第77巻, 第673号, pp.129-134, 2012.
- [11] Aimi Mochinaga and Shino Okuda: Façade Design of Machiya-Cafes Renovated from Traditional Houses for Good Landscape in Takayama-City, Journal 2011 International Symposium on City Planning, Preservation of Historic City and Planning, pp.582-588, 2011.
- [12] 奥田紫乃: 京都・高山における町家カフェファサード評価法に関する研究—評価者の地域特性が評価に与える影響—, 日本都市計画学会都市計画論文集, 48(3), pp.1059-1064, 2013.
- [13] 金華, 村川三郎, 西名大作: 中国・日本・欧州の被験者による河川景観の認識・評価と注視特性に関する分析, 日本建築学会計画系論文集, 第559号, pp.71-78, 2002.
- [14] 西名大作, 村川三郎, 金華, 大石洋之: 中国・日本の被験者による地域景観の注視特性と評価構造に関する分析, 日本建築学会計画系論文集, 第557号, pp.103-110, 2002.
- [15] 川瀬功太, 西名大作, 陸偉, 金華: 広島県の観光景観画像に対する心理的評価に関する研究—中国人学生・中国人留学生・日本人学生を被験者として—, 日本建築学会環境系論文集, 第708号, pp.99-108, 2015.
- [16] 權泰穆, 小浦久子: 都心住宅地における歴史的環境の保全施策と居住者の環境評価に関する研究—韓国・ソウル北村地域の都市型韓屋を事例にして—, 日本建築学会計画系論文集, 第598号, pp.95-100, 2005.
- [17] 權泰穆, 小浦久子: 歴史的景観保全を目的とする経済的支援施策による居住環境変化に関する研究—韓国・ソウル北村地区の開放型韓屋の影響—, 日本建築学会計画系論文集, 第615号, pp.15-20, 2007.
- [18] 羅羽哲, 阿部浩和: 韓国大邱邑城区域における都市型韓屋の維持・転用の現状と住民意識に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 第677号, pp.1633-1642, 2012.

奥田 紫乃 (正会員)

2001年 大阪大学大学院工学研究科 後期博士課程修了, 博士(工学).
現在, 同志社女子大学生活科学部 准教授. 居住環境学, 光・視環境評価, 視覚心理・生理に関する教育・研究に従事. 日本建築学会, 照明学会, 日本色彩学会, 日本人間工学会, 日本都市計画学会, 日本官能評価学会等の各会員.